

初日の午前中の、ディレクトフォースの方々とのディスカッションでは、とても気づきが多かったです。海外で働いていたことがあり、どの方も世界を見てきたこともあって、日本しいては私達の住む宮城の視野では、まだまだ狭いことがわかりました。IEA の元事務局長である、田中伸男さんの講演では、意外と知らなかった国際機関の仕事やその具体的なこと、外国のエネルギーの需要供給問題、東日本大震災を経ての日本のエネルギー問題に対する態度など、詳しくお話ししていただきました。石油石炭といった化石燃料の枯渇が叫ばれる、将来の地球において中心を担っていくこととなる私達にとって大事な内容であり、これから更に関心を持って深めていくべきだと感じました。

小グループでのディスカッションでは、一人目の中村修子さんは、多くの職を経た上での経験を話してくださいました。二人目の遠藤恭一さんは、広い視野を持ち、若い頃に世界を見ることの大切さを話してくださいました。また、情報あふれる現代で、ただ受動的に受け取るのではなく、自ら情報はとってくるものである。そんな、これからの在り方も教えてくださいました。三人目の富永夏子さんは、ディレクトフォース活動写真を担当しており、また、ハンセン病についても追いかけてきたそうで、医師を志している私達にとっても興味深いものでした。また何かの病が同じように流行った際に、このようなことを繰り返す恐れがあります。ハンセン病患者の隔離が問題となったのは、私達が産まれる前ですが、見つめ直す事案だと感じました。四人目の長崎文康さんは、ブラジルに長く滞在していたことがあり、自分のやるべきこと、ものの考え方を教えてくださいました。どの方のお話も興味深く、心に残るものでした。

一日目夜の二高 OBOG との懇談会では、東大をはじめとする難関大学に進学した先輩方の大事なお話をたくさん聞かせていただきました。すべての先輩方の話を聞くことはできなかったのですが、共通していたのは小さくても大きくても目標を決めて、高校一年生のうちから頑張ることでした。一人目にお話しして下さった東京大学法学部の先輩は、苦手だったという数学の実際の克服法や、大学で聞いた話など、惜しみなく教えてくださいました。二人目の法学部の先輩は、理系で合格して文系に進んだ方で、この話がきっかけで私も少し文系に興味を持ちました。また同じ女性ということもあり、勉強方法や高校の過ごし方など、積極的に取り入れて行きたいです。三人目は、東大に合格したあと企業をし、今は大学を休学しているという先輩でした。じぶんの中に確固たるものを持っていて、とても憧れました。最後に全員からメッセージをもらい、どの言葉も心に残るものがありましたが、とくに響いたのは『自分自身の指標を持つ』という言葉です。やはり、自分の中に譲れないものがあるというのは、自分のやる気の源だったり、道標となったり、そして人から尊敬されることだと感じました。それを見つけるためにも、身近なことから積極的に関わっていきたいと思いました。

二日目の東大のオープンキャンパスでは、事前予約をしていた二つの模擬講義に加えて、自分で東大の中を回り、空気を味わってきました。一つ目の模擬講義、「専門医学としてのリハビリテーション」では、私は医学部に興味があることもあって、とても面白かったです。実際の症例や、その原因、また、リハビリテーションの起源まで遡ったりと、高校生の私達にも分かる範囲で、実際の医療に近いことを学びました。二つ目の模擬講義は、わたしは理系志望ですが、文系学部の講義に関われるのはここしかないと思い、文学部の「日本文学からわかる視覚のしくみ」を選びました。梶井基次郎、太宰治といった、有名作品を題材に文章を読み解いていくと、ただの情景描写に思えたそれも、深い意味を内包しており、技巧として視覚についても触れていたと

は、全く考えられませんでした。しかしそれをもとに、物語のリアリティが上がっているのだ、そんなに細かいことまで詰まっていたのか、と思い、改めて本の重みを感じました。視覚について、つまりは理系科目に見えるような内容も、文系学部でも研究していて、今までよく知らなかった文学部についての具体的イメージも持つことができました。理系志望だとしても、道はそれだけでないと思えたことは、なによりも収穫です。その他にも、医学部のパネルを見て回り、医学の歴史や、昔の注射器などの医療機器、またインフルエンザなどのウイルス感染について、見て回ることができました。オープンキャンパスの終盤には、敷地内を歩き、最後には医学部図書館で現役東大生に交ざって自習してみました。やはり本場の空気は特別で、ここで学びたいとも思いました。オープンキャンパスで買った、東京大学の名前入りシャーペンと共にこれから頑張りたいと思います。

予定がなかなか合わなかったため、東京の滞在のあとでしたが、天野教授に仙台厚生病院で、お会いすることもできました。天野教授は、天皇の心臓バイパス手術をした方です。仙台には手術をしにいらっしゃっており、手術が長引き、帰る時間が迫る中、私達のために時間を割いてくださいました。

また、厚生病院のご好意で、二高 OB で厚生病院の他に国境なき医師団に属している外科医の池田先生にもお話しを伺うことができました。高校三年生のときに聞いた、国境なき医師団の方の講演をきっかけに医者を目指した方です。今までで、もう何回か紛争地に派遣されており、その経験を教えていただきました。

国境なき医師団は、運ばれてきたならば政府軍であろうが、過激派であろうが助けます。中立を貫き、人を助けることが国境なき医師団の信念です。過激派を一人助けると、その人が後々相手軍の兵士を何十人と殺すかもしれません。しかし、だからと言って見捨てるということは有り得ないことです。病院からは外出禁止ですか、近くで銃声や戦闘機の音、爆発の音も聞こえます。病院には銃痕が残っていることもあります。毎日多くの方が運ばれて来ます。きっかけとなった、その講演では「私が何時間か寝たら、何人もの人が死ぬ」という言葉を聞きましたが、まさにその通りです。

衝撃的な話も多かったのですが、思ったよりも環境はいいのだそうです。発展途上国だからと言っても、設備は国境なき医師団の半数を占める、非医療従事者の方々が調達し、食事なども同様です。少し環境や道具が悪くとも、一人前の医師ならば大丈夫だそうです。また、病院を開く際も、その地域を占領している組織に許可を得てから開き、屋上に国境なき医師団の旗を貼り、GPS で位置を正確に教えることで、戦闘に巻き込まれることを極力回避できるそうです。高校生の頃からの夢を実現した池田先生のお話は、私たちにとってとても参考になるものでした。

今回の東京大学・企業大学訪問では、一生に一度、あるかないかの貴重な出会いが多くありました。人生の先輩にあたる経験もたくさん聞かせていただき、自分の将来のビジョンに少し明確さを持たせることができました。今やるべきことを、きちんとやっていく。それが将来につながると思います。それに気づかせてくれたこの企画に関わった、仙台二高の先生方、笹川平和財団、日本財団、ディレクトフォースの皆様、並びに東京大学、仙台厚生病院の皆様、天野教授に心からの感謝でいっぱいです。ありがとうございました。